

# OSPDサーバUCS 240M4の交換 – CPAR

## 内容

[概要](#)

[背景説明](#)

[省略形](#)

[MoPのワークフロー](#)

[前提条件](#)

[ステータスチェック](#)

[バックアップ](#)

[新しいOSPDノードのインストール](#)

[UCSサーバのインストール](#)

[Redhatのインストール](#)

[Red Hat ISOイメージのマウント](#)

[RHELのインストール](#)

[アンダークラウドの復元](#)

[バックアップに基づくアンダークラウドのインストールの準備](#)

[Redhat登録の完了](#)

[アンダークラウドの復元](#)

[復元されたアンダークラウドをオーバークラウドに再接続する](#)

[完了したリストアの検証](#)

[アイデンティティサービス\(Keystone\)の動作の確認](#)

[将来のノードのイントロスペクションのためのイメージのアップロード](#)

[フェンシングの再起動](#)

[関連情報](#)

## 概要

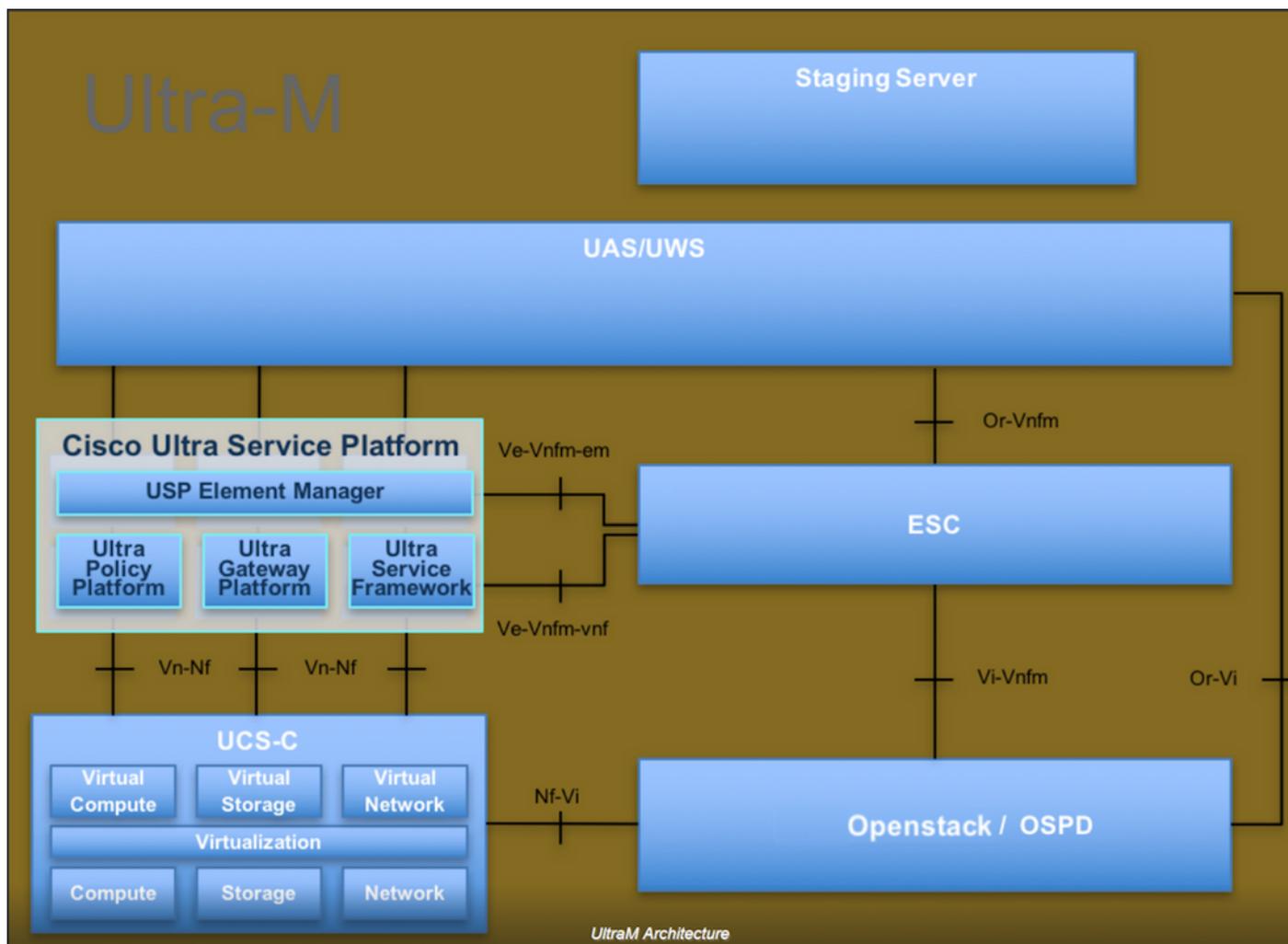
このドキュメントでは、Ultra-MセットアップでOpenStack Platform Director(OSPD)をホストする障害のあるサーバを交換するために必要な手順について説明します。この手順は、ESCがCisco Prime Access Registrar(CPAR)を管理せず、CPARがOpenStackに導入されたVMに直接インストールされているNEWTONバージョンを使用するOpenStack環境に適用されます。

## 背景説明

Ultra-Mは、VNFの導入を簡素化するために設計された、パッケージ化および検証済みの仮想化モジュールコアソリューションです。OpenStackは、Ultra-M向けの仮想化インフラストラクチャマネージャ(VIM)で、次のノードタイプで構成されています。

- 計算
- オブジェクトストレージディスク – コンピューティング ( OSD – コンピューティング )
- コントローラ
- OSPD

Ultra-Mのアーキテクチャと関連するコンポーネントを次の図に示します。



このドキュメントは、Cisco Ultra-Mプラットフォームに精通しているシスコの担当者を対象としており、OpenStackおよびRedhat OSで実行する必要がある手順について詳しく説明しています。

注：このドキュメントの手順を定義するために、Ultra M 5.1.xリリースが検討されています。

## 省略形

- MOP メソッド
- OSD オブジェクトストレージディスク
- OSPD OpenStack Platform Director
- HDD ハードディスクドライブ
- SSD ソリッドステートドライブ
- VIM 仮想インフラストラクチャマネージャ
- VM 仮想マシン
- EM エlement マネージャ
- UAS Ultra Automation Services
- UUID ユニバーサル一意Identifier

## MoPのワークフロー

